

チュプキで観る映画は、
ひと味違う

また映画館で

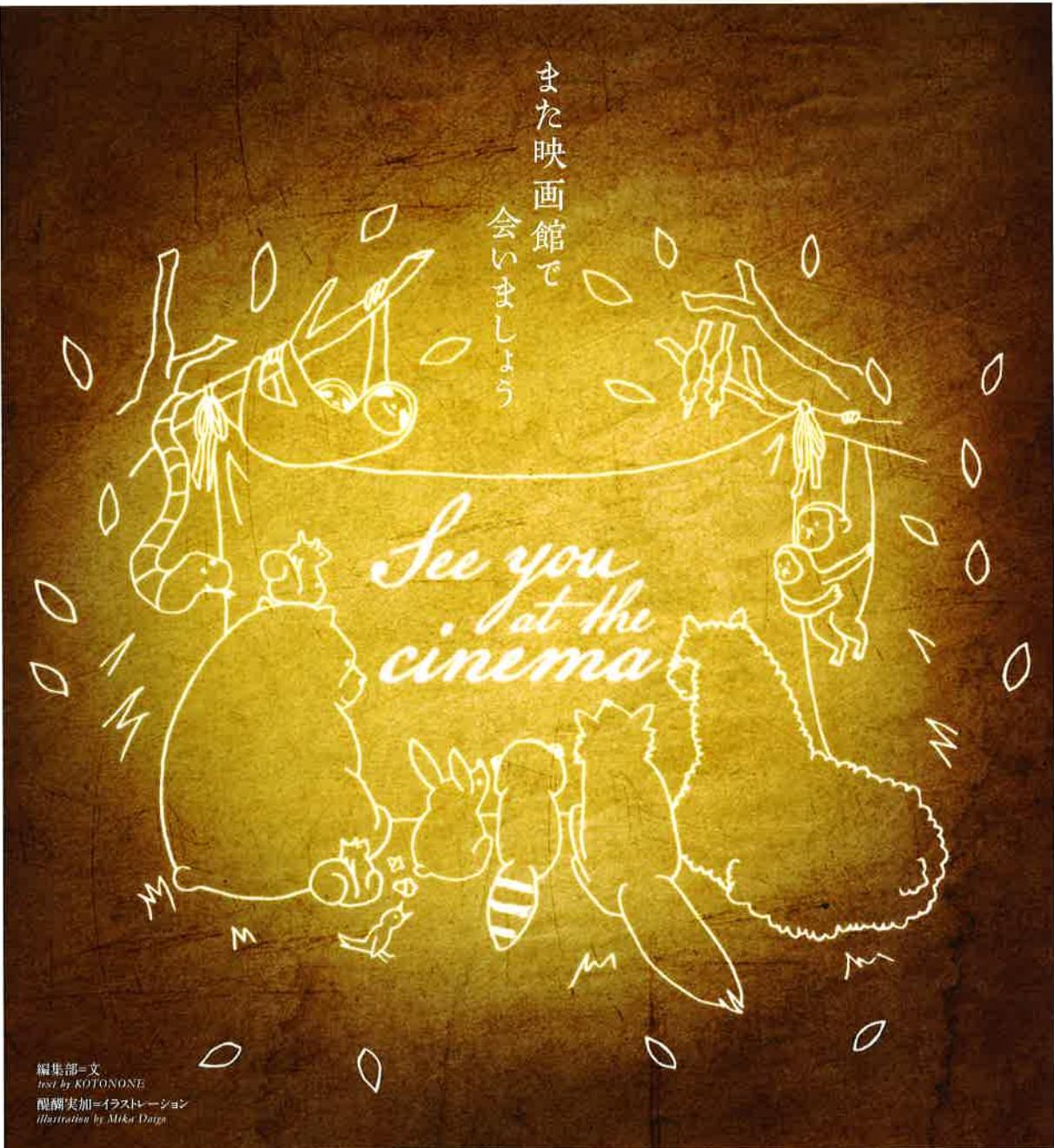
会いましょう

*See you
at the
cinema*

編集部=文
text by KOTONONE
醍醐実加=イラストレーション
illustration by Mika Daga

ここをつくったのは、視覚障害者も
映画を楽しめるよう、音声ガイドの
環境づくりを行うボランティア団体
シティ・ライツ。上映会を続けていく
中で、念願だった常設の映画館の開
館にこぎつけた。すべての上映作品に
は、音声ガイドと日本語字幕がつい
ている。映画館は普通、お客様の入
りを見て、上映作品を週単位で変

二〇一六年に開館した日本唯一
のユニバーサルシアター、シネマ・チュプ
キ・タバタ。チュプキはアイヌ語で、光を
意味する。森をイメージした劇場に
あるのは、パリ・オペラ座にも採用され
ているキネット社のシートに、森の中
で豊かな音の粒が降ってくるような
イメージを具現化した音響設備。大
のコーヒー好きの代表・平塚千穂子
さんおすすめのコーヒーモ、注文でき
る。一つひとつものの選び方に、思い
が感じられる。席数たった二〇席の
小さな映画館だ。



えていくが、チュプキでは上映作品は月ごとに固定。「障害をお持ちの方は、外出時にヘルパーさんをお願いするので、あらかじめ時間が決まっていると、頼みにくいので…」と平塚さん。みんなが楽しめる映画館は、ただバリアフリー環境を整えればいいわけではないのだ。

社会の問題を浮き立たせてくれる存在

作品は、話題作から、障害のある

人のドキュメンタリー、昔のクラシック映画まで、さまざま。「人権だとか、

障害者のことを知つてもらいたいって

いうのもあるけど、エンタメとして映

画を楽しみたいっていう当事者の希望もありますから、バランスですね。でも、障害のある人をテーマにした作品

は、ここ最近本当に増えたなと思います」。たとえば二月にチュプキで上映した『37セカンド』は、脳性麻痺の女の子が主人公の映画。当事者である

佳山明さんが演じた。「障害のある方の人生は、普通の人より、ドラマチックですしね。でも特別な人の話と

いうよりは、重なる部分を見てもらいま

たいなと思います。障害者は、その生きづらさを通じて、社会の問題を浮か立たせてくれる存在でもあると思

うんですよ。社会のことをいつしょに考えるためのツールとして、紹介しているつもりです」。常連のお客さんの

中には、視覚障害の男性と聴覚障害の女性のカップルがいるという。コミニケーション手段が違う二人が、同じものを、同じ瞬間に楽しめることが、どれだけうれしいことだろう。

チュプキがともす新しい灯

目の見えない人のために制作された

てきた音声ガイドだが、最近では、新しい映画の楽しみ方を提供するツールにもなっている。「アニメなんかは、音

声ガイドを声優さんにお願いをしてつくることも。うちだけなので、通つてくださるファンの方もいて。劇場にいる方全員が、イヤホンで聞いていると

きもあります」。古い洋画で吹き替え版がない場合は、音声ガイドに、吹き替えと場面説明のナレーション、ど

ちらも吹き込むが、これが、字幕を

目でとう必要がなく、もととの役者たちの声も楽しめる、健常者にも好評なのだという。

今後上映予定の斎藤陽道さん

(写真家、ろう者)のドキュメンタリー

『うたのはじまり』では、絵字幕という新しい試みが使われている。日本語字幕に加え、ろうの人にも、もつと「歌を見える」ようにしたいと、音楽を聞いて、アーティストが五線譜の上に描いた絵が、字幕のように入っています。「音声ガイドも字幕も、障害者のためのものじゃなくて、鑑賞を一度深く知る、おもしろくするツールになつていつらと思っています」。誰もが楽しめる映画館は、新しい映画体験ができる場所だった。

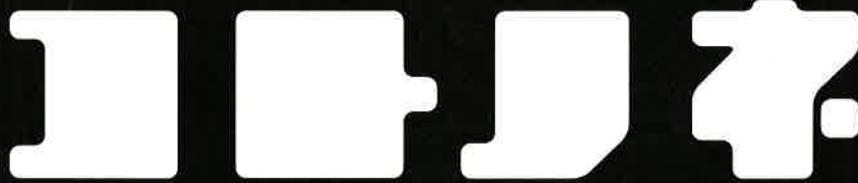


ロビーの天井部分。
葉っぱには、開館のときに行ったクラウドファンディングの支援者の名前が書かれている



東京・田端駅をおりて、徒歩5分。
商店街の中にチュプキはある

社会をたのしくする障害者×ディア



KOTONONE VOL.34

Featured Story

福祉を、しゃべろう
特集

